
セレブでミステリアスな学園生活

James ・ Black

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セレブでミステリアスな学園生活

【Nコード】

N8336X

【作者名】

James・Black

【あらすじ】

私の恋姫の前で後な作品。

セレブな連中の不思議？な生活をお楽しみください（腹立たせてください？）

前書き（設定説明）が異様に長いのは仕方ない（筆者の筆力の無さ故）と思ってください。

別作（チートでチートな三国志・そして恋姫十無双）にも言えますが、投稿後30分ほどは誤字脱字・文法及び論理的誤りについてかなり改訂します。

どうしても、書いてそれを投稿する時だけでは見落としがあるためです。

それ以外の時にも上記の誤りを発見した際は予告なく訂正します。ストーリーに大きな影響を与える際は次話の前書きにて告知しますが。

前書きその1

メイン作品である恋姫すら始まったばかりで、しかも週一更新すら微妙で不定期だというのに、もう1作並行させて頂くことをどうかお許しください。

適当に名前と施設の名称だけを変えて「にじファン」様ではなく、「小説家になろう」様のほうに投稿したいなあ……とも考えていたし、今後別のヒロインで書くならばそうするつもりではあったのですが……。

それでも並行する理由は単純です。恋姫作品のほうで、たまに、「早坂さん」だの「藤田さん」だの「不動先輩」だの出てくる（これからも、あくまで予定ですが……）ので、設定が多少は分からないといつまらない（意味が分からない）だろうなと思ひまして。こっちは完結までほぼストーリーはできていますが、とりあえずは夏休みまでを描く予定です。それ以降は恋姫がメド（完結かその見通し）ついたら再開するか時々更新にしようかなと思います。

今作は、恋姫の前の作品としてBase son様から発売中の「春恋＊乙女」（以下原作）の2次創作です。

とはいえ、原作はタイトルとは似ても似つかないドロドロ劇。しかも私の好みの子（松原麗架）はレズっ娘かつストーリーによっては悪女？ともいえる働き。

挙げ句……。

（犬です。犬。後述）

恋姫が面白いし、セレブ設定だし、でなんだか興味あるな……と思って買ってみたなら……。うーん。これはいくらなんでもひどい。

なので、キャラと設備の名前、顔（拙作では力不足故殆ど描写されないが）以外は全く異なります。

そして、キャラは女性が多いのですが、この小説ではヒロイン（最後にゴールインするキャラ）は唯一人と決めているので、このシナリオでは松原怜架ルートにします。先にバラして（決めてそれでいくようにして）おかないと恋姫二次創作と上手くバランスとれないのでやむなくです。何でこの子がヒロインじゃないの？と思われるのは困りますし。

麗を怜にしたのは個人的なある理由。まあ、深い意味はありません。

そんなわけで、書かせて頂きます。時は2001年3月（メイン開始）

恋姫の主人公、北郷があつち（外史）へ行つたのはこの年の夏です。

恋姫よりさらに困難なのは、タイトルと人物名とセレブの風習。そして方言と地理。名古屋わからん……。　（筆者は東日本のド田舎育ちの貧乏人）

恋姫でも毎回困っていて、こっちでも困るだろうと思つのはサブタイトル。

まあ、想像（創造）しますが。

フィクションであり、ノンフィクションでもあります。

実在の人物、業界、時事などがゴロゴロ出てきます。多分現実とは違つたろうな……。とは思いますが。

パロディも大量にあるかと思います。また、9・11や3・11の影響も少し出てきます。申し訳ないですが、嫌な方はブラウザバックでお戻りくださいとしかいいようがありません。

テニヌと黒子のバスケ（バヌケになりつつある……）というWJのトンデモスポーツともクロスさせようかとも思ってたんですが、流石にアレなのでやめました。

人の名前で由来わかる（憶えている）ものは解説入れます。

もちろん、2001年とはいえ、スマホやタブレットがあったりと現実の2001年ばかりではないですが。

では、まず人物設定から。基本的に意味あることしか書いてません。かなり嫌味な記述が多いですが。

はやさかあきひと
早坂章人

主人公。旧公家（華族）、早坂家（後述）の長男。全てにおいて完璧なチートキャラ。

身長185cm・体重70kg。

常人の数倍の動体視力（on・off・調節が可能）・関節の可動域の広さ・筋繊維は常人の1・2倍・神経の異常性（常人では反射とそうでない運動では脊髄までいくか脳まで行くかで反射速度が変わるが、彼は常人の反射が自分にとってはそのでない運動の速度）

（わかりにくいなら、漫画”アイシールド21”の金剛阿含の上だと思つて頂ければ）・自力でゾーン（極限の集中状態、フローやピークエクスペリエンスとも言われる。黒バスの青峰・火神参照）に入れる、といった数多の才能や特技を持ち、音楽（ピアノ・ヴィオラが得意）や芸術にも造詣が深く、勉強は過去のテストでは（上の学年に混じつて受けた模試以外）満点しかとつたことがない……など、”万能の天才”のように思われている。

しかし、彼をよく知るわずかな者と本人が知りえる最大の特技は、人物評と洞察力の鋭さである。

唯一の欠点は傲岸不遜に見られがちな言動。

サッカー・野球以外のスポーツは一通りこなす。（サッカーをやらないのは作者が分からないため。無論作中の理由は別。野球をやるらない理由は……。）

中学時代は、帝光中（黒バスとは無関係）に在籍。バスケット以外最弱で市すら突破できなかったテニス部をわずか3ヶ月で全中制覇に導く。そのまま3連覇し、常勝軍団の礎を築く。

昨年は国体にてバスケットで参戦。決勝でもダブルスコアで圧勝し、スポーツ界では”怪物早坂”もしくは”鬼才早坂”と呼ばれる。

昔、名古屋で行われた剣道の全国大会に小学生でありながら高校生以下の部に出場し、優勝したことがある。剣道歴は14年。

憧れの人物は楠原守彦（後述）・堀内宗心（実在の人物、茶道家、彼の師）・丸山真男（実在の人物・既に作中でも現実でも逝

去)の3人。

が、目指すのは松原零寛 (後述)。

那岐沢千砂 (後述)とは深い仲ではあるものの、恋仲でも愛人でもない。

羽深との仲は良好だが……である。

趣味は読書・茶道 (表千家)・音楽鑑賞・美術品 (骨董品を含む)の収集と鑑賞・犬と戯れること。そして美食。

最大の宝物は東山魁夷に目の前でハガキの裏に書いて貰った絵。

2 - 2。文系。一人称は私。父母へは「父様」「母様」。妹の羽深は「羽深」と呼ぶ。

名古屋市内のマンションにて犬2頭との一人 (三人?)暮らしである。

コメント

原作と最もかけ離れたお方2人のうちの1人。

いろんなマンガや小説などの最強クラスのキャラを合わせてみた。

やつちやった感が強い（笑）

はやさかつみ
早坂羽深

早坂家長女。章人の実妹。（何でこんなに強調するかというと、原作では羽末という義妹で、羽深は死んでるとかいうありえないストーリーだったため。他はわざわざ”義”と書いていない限り100%直系です。）

身長153cm・体重45kg

兄と千砂に憧れ、慕っているが、周囲によるデキすぎる兄との比較により、劣等感を感じている。

テストでは常に90点前後をとる優等生。

兄の命で特別特待生（通称、特特待）の枠にて入学。

スポーツは陸上と水泳がそこそこ。

趣味はぬいぐるみの収集とヴァイオリン演奏。そして兄の真似とシンディ・クロフォードの情報収集。

憧れの人物は兄と千砂・そしてシンディ・クロフォード。

兄に頼みこみ、実現させてもらったシンディ・クロフォードと2人で写っている写真と目の前で書いて貰った色紙が最大の宝物。

1 - 3。一人称は私。章人のことは「兄様」、父母は「父様」「母様」である。

寮にて生活はしているものの、兄のマンションにも羽深の部屋が2つある。

コメント

原作では事故死。あーあ。しかも死因が書きたくないほど酷い……。知りたければ原作をどうぞ。

はやさかまきひこ
早坂慎彦

早坂家当主。

章人と羽深の父。

非常に頼りなく、高校以来楠原守彦に世話になりっぱなし。妻の葉とは大学で知り合う。東大法学部卒。

46歳。守彦と妻、そして息子の章人に助けられながら当主としての役割を果たす。東京育ち。

はやさかよう
早坂葉

慎彦の妻で章人と羽深の母。

非常にキツイ性格で、大学で出会った友人、楠原遙（後述）と意気投合して最大の友人になっている。が、何故ウマが合うのかは皆に不思議がられる。東大経済学部卒。

44歳。だらしない夫に喝を入れ、代わりに子を一人前にするのが責務だと思っている。東京育ち。

なづみちずな
那岐沢千砂

身長172cm、体重58kg。

極めて温厚な性格ながら、章人の懐刀と言われる策士。才媛の手本のような方でもある。

章人からは、大勢の前では「那岐沢くん」、親しい人の前では「千砂くん」と呼ばれる。

本人は、それぞれ「早坂さま」「章人さま」と呼び分けている。

羽深からは「千砂お姉ちゃん」とよばれ、羽深のことは「羽深ちゃん」と呼ぶ。

周りでは何故章人と結婚（の約束）もせず、恋人関係にもならないのかが、何故葉と遙が仲がいいのかとの二大不思議になっている。

名古屋大経済学部2年。

性格などのモデルは中曽根政権時代の故、後藤田正晴氏。一人称は私わたくしわたしが私を場に応じて使い分ける。他は断りが無い限りわたしで統一です。彼女のときのみルビつけます。

コメント

原作でも策士。まあ、かなりまともな部類。

原作と最もかけ離れたお方2人のラスト。

くすはらもりひこ
楠原守彦

遙の夫で彩香の父。

章人のチート能力の殆どを持ち、更に筋繊維が常人の1.5倍あり、速筋と遅筋の区別がないため、章人が唯一スポーツで勝てない相手。

全日本剣道選手権において、高校3年（18歳）からの前人未踏の5連覇を果たす。が、ある2つの理由にて剣道からは一時手を引く。章人に剣道と柔道を教え込み、彼が絶大な力と洞察力を持つようになったのはこの守彦によるところが大きい。

大学1年目に司法試験に合格し、翌年には公認会計士試験にも合格。弁護士と公認会計士の2つの肩書きを持つ。

本職は弁護士だが、慎彦のフォローに忙しい毎日。東大法学部卒。46歳。東京育ち。

娘をこれ以上ないほど溺愛している。

コメント

原作ではこれ以上ないクズ親つぷりを披露。名前は不明。

もうちょっと何とかならなかったのだろうか……。

名前の由来は漫画「探偵学園Q」の団守彦から。

くすはらはるか
楠原遙

守彦の妻で彩香の母

おとぼけで温厚で何を考えてるのかよくわからないポーカーフェイス

スな人。

のりくらりと全てをかわし、その上、周囲を和ませる能力を持った不思議なお方。

ちゃんと良妻賢母です。東大文学部仏文科卒。44歳。名古屋育ち。

（コメント）

原作では病気、おそらく（確か）心臓で死去。やはり名前は不明。それでも、かなりまともな方かもしれない。

くすはらあやか
楠原彩香

身長162cm・体重50kg。

原作では”か”が夏ですが、他の季節（特に冬）が嫌いになるな…
…ということに変更。

やはり（母に似て、原作通りでもある）おとぼけキャラだが、偶に鋭いひらめきを見せる。

如月・沙織（後述）・怜架・皐月（後述）と5人で仲良しグループ。このグループは全女学生憧れのグループでもある。のためかつ

ては様付けされることもあったが、本人は嫌うため、それを知らない者以外呼ぶものはいない。

両親が早坂家と親しいため、章人・羽深とは幼なじみ。が、千砂との縁は知らない。悠季（後述）とは章人を通じて知り合い、互いにちゃん付けして呼ぶ間柄である。

将来の夢は章人と結婚すること。いたって健康体。

趣味は絵を描くことと見ることに、そして音楽鑑賞（ただしクラシックのみ）。カラオケではなぜか童謡しか歌わない……。

3 - 2。文系。成績は中の上。

（コメント）

原作では犬を拾うものの、予防接種も打たずにジステンバーで死なせる（事実上殺す）という今時あり得ない（愛犬家の私には暴挙としか……）話に。

心臓に持病があり、選択肢間違うと墓に逝かれます……。やりすぎだよ。シナリオライターさん。ある意味ぬまきちさん以上です。

本人がある意味病んだのはまあ、致し方ないですね……。

まつばられいかん
松原零寛

怜架の祖父。怜架を溺愛し、とある人物を狙う。日本銀行連盟会長。
旧華族であり、東海銀行（後述）の相談役。京大経済学部卒。78
歳。

まじばられいか
松原怜架

ようやく廻ってきたヒロイン（紹介の欄）。

身長175cm、体重65kg。本人は若干太り気味かと気にして
いるが……。

ある理由から男が嫌い。（レズではない）

他の女学生の殆どからは様付け（しないのは4人のみ）されるが、
本人はそれほど好んでいない。

如月・沙織・皐月・彩香と5人で仲良しグループ。

水泳部主将。 昨年は部で唯一の夏大会個人戦中部地区大会出場を果たす。

種目は200m個人メドレー（今作では以下コメと表記）。

3・2、文系。 成績は如月・沙織と3人でトップ争いをする才女でもある。

一人称は私。

コメント

原作ではつかみ所のないのらりくらりキャラだった。が、章人・千砂・遙にその座は完全に奪われた。

原作ではいい人だったり、……だったり微妙。

彼女が最初の（設定とシナリオを若干変更すればゲームしながらにヒロインは変えられるのに）ヒロインになったのは実は筆者のキャラや容姿の好みではなく、エレナ様のお陰（全キャラ中無関係に一番好きではあるが……。）だというのはここだけの秘密。

おおとりげんみょう

鳳玄妙

皐月の祖父。

代々会計士をする家柄で本人も妻も息子夫妻も会計士。京大経済学部卒。78歳。

おおとりさつき
鳳臯月

身長167cm、体重56kg

ずっとクラスの委員長を務めている。

何かと暴走気味な如月・沙織・怜架・彩香と5人の仲良しグループ唯一の良心。基本的に他の生徒からは臯月さんと呼ばれる。

真面目の上に「クソ」が付くようなお方。かなり性格はキツめ。歌はフォークが大好き。

美術部部长。3 - 2、文系。

一人称は私。

コメント

原作でかなりまともな部類に入るお方。

原作では演歌が好きらしいのだが、筆者は全く知らないので多少分かるフォークに変更。

そうまだよし
相馬忠義

沙織の祖父。

旧華族で、資産家。

そうまあり
相馬沙織

身長172cm、体重58kg。

普段は真面目なのだが、怜架達とのグループでは一転、臍月が苦勞する最大の要因となる。他の生徒からは沙織様と呼ばれる。

一人称は私。たまにアタシ。趣味はお菓子作り。誕生日は6月14日。

生徒会長。3 - 2、文系。

コメント

考えてみれば何故か生徒会長いないよね？

というので導入。兼務はどうかと思ったので。

ふゆるぎじゅうれい
不動柳黎

不動グループ会長。如月の祖父。とはいえ、経営からは一線を退く。
実は不動グループを日本有数の大企業に押し上げたのは彼の代である。

松下幸之助と並ぶ”経営の神様”と呼ばれるも、本人はそんな器ではないと一貫して言っている。

京大経済学部卒。78歳。

コメント

なんだか”れい”の字が付くキャラが多いですね。

ふゆるぎまさゆき
不動雅之

不動グループ社長。

柳黎の子で如月の父親。娘を溺愛しているが……。

ふゆるぎみせ
不動如月

身長173cm、体重53kg。

剣道の腕前は天才レベルで、中学以来、公式戦無敗を誇る。剣道歴13年。

この作品での剣道の団体戦は先鋒・次鋒・中堅・副将・大将の5人で勝ち抜き設定なので、一人で5人倒しても団体優勝となる為、個人も団体も優勝を総ナメしている。

過去、同年代で敗北したのはただ一人、章人のみであり、ずっと追っている。

なぜか武士のような言葉遣いで喋る。一人称はそれがし。

沙織や怜架とのグループではさんざんなイジられ役に変化。誕生日は6月15日。

剣道部部长。3 - 2、文系。

前書きその1（後書き）

あーあ。やっぱり人物紹介すら終わらなかった。

3年までと主人公は終わりです。

前書きその2（前書き）

人物紹介その2

前書きその2

ふじたしやういち
藤田祥一

身長182cm、体重75kg。

”愛知の天才”と呼ばれるバスケの天才。ポジションはPG。

中学時代は帝光中を破り、全中3連覇を果たすものの、父の「スポーツ推薦で高校に行くなど許さん。」の一言で鷹宮学園に進学（家から近かったから）する。勉強もバスケも頑張り、IHではベスト8に入る。しかし、国体にて早坂擁する東京選抜にダブルスコアで敗北。ウィンターカップを区切りとして部活を辞める。

国体の大敗時にそれでも臆することなく早坂に話しかけ、毎度毎度藤田が模試で1位タイか2位になっている男だと判明し、意気投合する。

2 - 1、文系。一人称は俺。

きたこうかす
北郷一刀

恋姫の主人公。身長178cm、体重75kg。

剣道と酔拳が得意。鮮やかな技術で試合を制する”天才”不動如月

を尊敬し、憧れている。

剣道歴11年。

小学生の癖に高校生以下の部に出たり藤田をバスケで圧倒するのを応援に行ったりして、目の前で見た早坂のことは、たくさんスポーツに手を出す無節操さやその傍若無人さからあまり快く思っていない。

2 - 4、文系。一人称は俺。

おいかわたすく
及川佑

早坂とは友人。藤田を尊敬している。

適当な関西弁で喋るお調子者。

2 - 4、文系。一人称は、ワイ。

ありせゆうき
有瀬悠季

身長165cm、体重53kg。

茶道、有楽流家元”有瀬宗祐”の一人娘。

が、本人は茶道が大嫌い。

茶道関係の行事ををサボっているときに偶然章人と出会い、仲良くなる。その縁で羽深、彩香とも親しくなる。が、やはり千砂のことは知らない。

水泳部に所属しており、平泳ぎが得意だが、唯一部長の怜架に憧れていない人物でもある。

理由は章人が大好きだから。散々その話では彩香と揉める。

最大の親友は同じクラスで部活も一緒の織戸莉流。

2 - 2、文系、水泳部所属。

コメント

原作ではコイツが色々引つかき回します。レズっ娘でした。

有楽流は実在しますが、代々の家元の名字は”織田”。今作ではさすがに堅すぎるので変更。なんだかあまりにいろいろ踏みにじっている気が……。

一応原作でも茶道の家元の子です。

ありせそうめう
有瀬宗祐

悠季の母で有楽流の家元。

女性でありながら珍しく家元になったお方。

とても大らかな女性だが、悠季の将来だけはひたすら心配している。
(章人に結婚の意思が何故か全く無いため)

ありはせきうん
有瀬曉雲

悠季の父。

庶民の出ながら、相思相愛でなんとか宗祐と結婚(婿入り)する。

しかし、殆ど悠季と関わる暇が無い為、悠季との関係はあまり良くない。

超が付く名家の癖に悠季と結婚したからない章人のことをかなり嫌っている。

おりとりる
織戸莉流

身長150cm、体重40kg。

章人の隣の席になる女の子。お嬢様学校にありながら非常にノリの良い、珍しい性格。

理由は彼女が宮大工の家に生まれ育ち、職人に囲まれて育ったため。

趣味はお菓子作り。

水泳部に所属し、誰よりも怜架に憧れている。そのため今のところ怜架と同じメドレーが競技種目。

悠季は最大の親友である。

2 - 2、文系。

御子柴夏子^{みこしばなつこ}

身長163cm、体重48kg。

新城冬子（後述）とは家のつながりも深く（無論一番の親友）、不動・相馬・松原（本当は+有瀬）に続くような名家の子。

これまで血縁と執事以外の男性とは店に行くとき以外関わったことが無く、ましてや同年代の男子とはお見合い以外で喋ったことが無いので、共学化をととても楽しみにしている。

なかなか気が強い。

2 - 2、文系。

柴田秋菜^{しばたあきな}

身長160cm、体重45kg。

夏子の従姉妹。佐藤春菜（後述）とは親友。無論家のつながりも深く、4人で買い物に行くこともある。

剣道歴8年。不動如月は憧れ。ライバルは春菜。章人のことは知らない。

1 - 1

あらきふゆこ
新城冬子

身長163cm、体重48kg。

夏子が最大の友人。極めてマイペースだが、夏子とのコンビネーションは抜群。凌ぐのはただ1組のみ。（多分対決は描かれないが……。）

好奇心旺盛で、あまり恐れを知らない。毒無しとはいえ、10kgもする蛇を旅行先の動物園で首に巻いて夏子を卒倒させたことがあるほど。

2 - 2、文系。

さとうはるな
佐藤春菜

身長160cm、体重45kg。

冬子の従姉妹。柴田秋菜とは親友。無論家のつながりも深い。

剣道歴8年。不動如月は憧れ。ライバルは秋菜。章人のことは秋菜同様、知らない。

桐生きりゆうソーニャ

身長151cm、体重39kg。

イタリア人と日本人のハーフ。父親は日本人で、母がイタリア人。今作唯一（爺さん連中の白髪は除く）髪が黒じゃない人。金髪。

父親が病死した後、母親は父の遠縁の桐生家にソーニャを預け、単身で帰国。

事情は不明。

1 - 3。

桐生きりゆう舞衣

ソーニャの義母。

学校にある教会のシスター。温厚な性格。既婚者で35歳。

まみやりりか
真宮璃璃香

身長155cm、体重43kg。

如月の遠縁で、幼い頃からあこがれの存在。会うといつでも可愛がってもらっていた。

プライドが高いが……どこか卑屈なところがあるような気も。

コメント

本来は璃々香。なぜかルビが上手く出ないのでのみ変更。

1 - 3

以下教員等、学校関係者。

おおがみちえ
大神千絵

とても堅くて真面目な先生。担当教科は国語（現代文・古文・漢文）、章人たち2 - 2のクラス担任になる。

27歳。

ももくろなきい
百草紀理子

腰まで伸びたクセのある髪が特徴。

桜陰中 桜陰高 早稲田大学と進む過程、ライバルかつ親友3人と共に”四天王”と呼ばれ、テニス部で通算11連覇という離れ業を達成。

将来を嘱望されたテニスプレイヤーかつスポーツトレーナーだったが、何故かその道には進まず、教職に就く。

昨年はその経歴を知ったバスケット部が勧誘に来て顧問兼コーチになったものの、コーチとしては昔と何も変わらなかったため、生徒からはそれを疑問視する声が多い。

担当教科は数学。怜架たち3・2の担任になる。

名前の由来はマンガ『M0（エムゼロ）』より。深い意味はない。何となく使いたかった。

りゅうぜんじてつや
龍禅寺徹哉

保健室の先生兼剣道部顧問兼学食、黎明館のオーナーと、不思議なお方。

身長148cmと小柄で童顔。が、不思議と貫禄と人にふと本音を打ち明けさせられる特技があるため、生徒からの評判は高い。

黒帯2段の柔道有段者でかなり強く、かつては本気で五輪を目指していたが、「お前にはむかない。」と師に言われ、それでも諦められずにいたところ、「もしコイツに勝ったら認めてやる」と師に言わせた。相手は小学生の時の章人。10回挑み、毎回敗北。が、「キミには医者、精神科医とかのほうに向いてると思うけど？あるいは、校医とか」と章人に言われ、その道に進むことにする。

27歳。

コメント

そんな小学生はいない。

竜 龍にしたのは意図的なものです。

カシナート・クーガー

愛知を管轄するカトリックの司教。

25歳。本人は何でこんな辺境のド田舎に飛ばされたのか不快な気持ちでいっぱい。

祖父はシュタインベック・クーガー枢機卿。現教皇、ヨハネ・パウ

口2世最大の忠臣であり、早坂家がバチカンを訪れる際は必ず会い、また時間が空いていれば自ら案内するほどの親密っぷりをみせる。

コメント

本来は妻帯は御法度らしいですね。

ライトノベル『空の鐘の響く惑星で』よりネーミング。

他

えんのこうじひろつく
越小路博嗣

身長182cm、体重68kg

ようせん
鷹扇高校（愛知のセレブ男子高）3年。

外資系企業、越小路グループ会長兼社長の一人息子。

コメント

一人くらい悪役いなきゃ面白くない。悪役にしては小物すぎるが。

さいとう
斎藤

名前は不明。早坂家の柱石、あるいは章人の右腕と称される男。

三菱銀行専務。貸し付け部門最高責任者。52歳。既婚。

コメント

モデルは美味しんぼの銀高専務（二木家が頭取やつてる銀行の専務、日本酒の話に出てくる）と田中角栄時代の故、後藤田正晴氏。

藤堂
とうどう

名前は不明。

斎藤の部下。32歳の若きエース。

前書きその2（後書き）

とりあえずの人物紹介はこれにて終わりです。あとは必要だと思っ
たらその時に説明します。

あとは設定（家）と学校の設備で前書きは終わりの等。

前書きその3（これで終わり）（前書き）

ようやく次回から本編開始です。

前書きその3（これで終わり）

早坂家

作中最大の名家。開闢は平安末期とも鎌倉とも。

本宅は東京都杉並区の某所。国内では京都と軽井沢に別荘を持つ。

かつては京都にあった名家だが、桃山時代末期から江戸初期にかけ、江戸へ移動。以後は本拠を東京に置く。

江戸末期から岩崎弥太郎に援助し、日本一の財閥である三菱財閥の礎を築く。

代々三菱グループの相談役を務め、三菱グループの社交会”三菱金曜会”の主を務める。

三菱銀行に対して特に絶大な影響力を持ち、三菱の軍師役を務める。この家のお陰でかろうじてGHQによる財閥解体を三菱・三井・住友のみ免れる（安田は頑張ったが無理であった）ことができた。

なので三菱、三井・住友は現在も財閥として存在。

茶道、表千家との親交は非常に深い。なお、三菱から入る年収は2千万もないくらいであるが、他に収入があるので総年収は1億を超える。

財産の総額は不明。うんざりするほどある美術品（一部は章人が収集）の一部は私営博物館・美術館に展示されているほど。

ロスチャイルド家との関係も深い。日本の財界の頂点に位置し、日本経団連・日本銀行連を含めた財界に絶大な影響力を持つ。

犬を3頭飼っており、ドーベルマン・シェパード・ボーダーコリーをそれぞれ1頭ずつである。

3頭とも極めて優秀で、家族にとっては番犬かつ最大の癒しの一つ。基本的な世話は章人が3頭とも行っている。

名前はそれぞれ、カイ・マックス・フルールという名。カイとマックスは雄でフルールは雌。6・4・4歳。

家訓と三菱社訓なるものが存在する。

コメント

こんな普通（早坂家の方には失礼だが）な名字で名家……。

まあ、それはいいとしてこんなチートはあり得ないわ。

本来は三井と表千家の関係が深いです。三菱金曜会なるものは本当にあるらしい（wiki）ですが、詳細は知りません。

松原家

本来は東海地方最大の实力者であり、先々代以降4代（ㇿ怜架の父）にわたり傑物を輩出。

早坂家との友好関係を築き、またトヨタに創業時から投資し、名実共に東海最大の銀行「東海銀行」の頭取を代々務める。創業者一族でもある。

が、全面に出るのはあまり好かない（零寛の方針）為、今は不動・相馬家のほうが家柄は高いと思われる。旧華族のため、実際は家柄は殆ど同じなのだが。

不動・相馬家とは家族ぐるみで親交がある。

相馬家

旧華族で、代々愛知の県議を務める。

不動家と並ぶ二大巨塔の一角とされる。旧華族の資産家。

不動家

化学工業系の巨大企業グループ、不動グループの創業家であり、中核の不動化学工業株式会社の会長・社長職に就いている。トヨタと並ぶ愛知最大の企業。

……にしたのは実は現会長の柳黎であるが、5年ほど前に一線を退いてからは業績は右肩下がり。原因は……………。

これまでは東海銀行を中心に多額の融資を受け、それを元手に拡大、企業の友好的買収により絶大な力を誇っていたが、最近なぜか融資額が減りつつある。

対外的には相馬家と並ぶ二大巨頭の一角。もちろん旧華族。

有瀬家

茶道有楽流家元を代々務める。安土桃山時代の茶人で信長の実弟、織田有楽斎おだうらくさいの子孫。ただし、ある理由により織田の性は名乗っていない。

ある意味早坂を凌ぐ家（比較のしようがない）である。

聖フランチェスカ学院

今時珍しいカトリック系の高校。昨年までは女子のみの学校だったが、少子化の煽りで今年から共学化し、男子も受け入れる（1クラス20人に多くて3〜4人程度）ことになる。最初の受け入れは対外募集（一応）と鷹宮学園の殆ど。

経営危機にあつた鷹宮学園の負債を東海銀行が肩代わりする際の条件が聖フランチエスカへの編入だった。

1組から8組まで8クラスあり、1〜4組は文系・5〜8組は理系となっている。

いわゆる“お嬢様学校”だったため、基本的に上流階級の子女ばかりいる。とはいえ、そのなかでも格差は歴然と存在するが。

敷地内に幼稚舎・中等部・高等部・短大部がある。上の5人は全員高等部。学生・卒業生から大量の寄付が集まるため、施設はかなり豪華。

（原作はたぶん東京のどこかの私立女子大をイメージしたものである）

今作は諸事情から立地は愛知県某市。基本的に男子も女子も寮で過ごす、申し出があるなどの場合、アパート・マンション・下宿などからの通学も可。但し、一人暮らしが前提となる。髪などの染色・ピアスやイヤリングなどの装飾具は一切禁止。

だから黒髪しかないんですね。例外はソーニャ。

学食の名は黎明館^{れいめいかん}。教会もある。

高校からの進学先は、ほぼ50%が自宅へ戻り結婚。約30%は短大部へ進学し、残りは他大学へ進む。就職者は脅威の0行進が続いている。

男子寮も女子寮も超豪華。見た目はマンション。長期休暇が他の学校とは違うなど色々面白いシステムがある。

偏差値は55前後と、悪くもなく良くもなく……。スポーツは如月と怜架が入学するまで弱小。と良いとこなしだったため、それをなくすため、特待生（学費のみ50%免除）の一部として新たに特別特待生（通称、特特待）を導入。

制度概要

入学から卒業まで¥0。寮費も昼食代も学校側が負担する。の代わりに学業もしくはスポーツで優秀な成績を常にとることが求められ、基準を2回連続で失敗した者は特待生に戻る。最低条件は寮に住むこと。

学業の場合、定期考査（7回）で最低偏差値65もしくは80点、平均偏差値70もしくは90点以上をとること。と学校指定の外部主催模試にて指定教科（学校側への申請と進学先の希望によって変化。英数国/英国/英数理理/英数国理理/英国社/英国数社のうちいずれか）で最低の年平均偏差値が60以上であることを求め

られる（年5回）

以上12回のうち、2回連続または通算3回（1年に）失敗した者は特待生に戻る。認定は試験（入学試験もしくは定期考査）で一定の成績を修めた者が選抜試験（年2回実施）を受け、合格することが条件である。

スポーツの場合、個人戦で県大会出場もしくは団体戦での地区大会（中部など）出場歴があり、監督・顧問などの推薦があればフロンチェス力の種目の部活の顧問の試験を行い、認められれば許可される。

こちらは認定されたあとは素行不良・かなりの学業成績不良・試合結果の相当の悪化がなければ継続認定されるので、学業より相当ハードルは低い。

特待生は定期考査にて平均偏差値60もしくは80点以上をとることで認定。

コメント

最初は点数か偏差値のみにしようと思ってました。

点数のみだと簡単なテストと難しいテストで差が大きいのので公平ではない

逆に偏差値のみだと、平均78点とかのテストのときに差が開かな

い・・・（多分60そこそこしかいかない）

という欠点に気づいて慌てて頭をひねる。結果がこの無理矢理な制度。

帝光中学校

東京都にある中学校。バスケットボール全国4連覇中の強豪だったが、藤田擁する来栖中学に3年連続で決勝にて敗戦。

早坂が入学して一転、テニスも超強豪に変化。現時点で全中5連覇中。

コメント

モデルはもちろん「黒子のバスケ」の帝光中学。

まあ、名前とバスケの強豪だということのみ拝借。

前書きその3 (これで終わり) (後書き)

長々と設定すみません。

章人Side 第1話 再会？（前書き）

ようやく本編です。お待たせして申し訳ありません。

章人Side 第1話 再会？

さて、詳しくはまだ秘密だけど、恐らく君と1年は近いところで暮らせるだろうと思う。

まあ、無論君の手元にこの手紙が届く頃、私は実家にはいないし、周りの者はそのことについては何も言わないようにしている。

昔のように突然君に家に来られては困るからね。というわけで、返信は無用だよ。然るべき時に顔を出しに行くのでね。

4月以降の来るべき再会を祈って。

章人

彩香へ

さて、詳しくはまだ秘密だけど、恐らく君と2年は近いところで暮らせるだろうと思う。

残念なことに、君がこの手紙を受け取る頃、私は実家にはいないので、君が返信を書く必要はないのだけれど。

4月以降の来るべき再会を祈って。

章人

悠季へ

ふう。一応彼女達には知らせておかなければ。行くのは清算の為でもあるのだから。

まあ、いつ会えるかは私には分からないが。

「ああ、すまないが、手紙を出しに行きたいのでちょっと新宿郵便局まで送ってくれないか？」

「はあ……。構いませんが、手紙の配達など私達の仕事でございませよ……。？自宅にも集配はくるのですし。」

やれやれ。毎度コレだ。何のための執事なんだが。まあ、私の意図

を汲み、必要なことをこちらが頼む前に手配するようなのは過去1人しかいなかったわけだが。毎度毎度ではさすがにねえ。まあ、アレは別格だ。忘れよう。

「嫌なのかい？ならまあ、タクシーでも呼ぶが。」

「い、いえ。滅相もございません。直ちに用意致します。」

まあ、逆らうような馬鹿はいないのだが、それがまた……である。

「兄様、お出かけですか？ 名古屋には千砂お姉ちゃんが住んでいるんですよ？それに彩香ちゃんや悠季ちゃんも。私楽しみで。」

「ん？ああ。ちょっと郵便局にね。全く楽しみだよ。まあ、正月に会ったばかりではあるけどね。住むのは別だろうから。」

全く、忘れようと思ったのに一瞬で思い出せてくれるなこの妹はどうせすぐ会っただが。

さて、行くか。

「すみません。風景印を押してそのまま出して頂けますか？」

「あ、はい。分かりました。こちらでよろしいでしょうか？」

若干不思議そうな顔をする局員。まあ、旅行客でもなければ珍しいわなあ。しかも宛名は性のちがう女性2人なわけだし。

「ええ。ではよろしくお願いしますね。ありがとうございました。」

そのまま帰宅。と、見覚えのあるクラウンが止まっているのに気づく。

「おう、帰ってきたか我がプリンス。」

「くだらない冷やかしなら帰りますよ。おやつさん。」

「ん？ちよつと気になる話をあのバカから聞いてな。アイツの勘違いだと思うが、一応確認したくてな。お前が聖フランチェスカに転校するって話。来るのは本当らしいが、鷹扇だよな？」

「ああ、その話なら本当ですよ。鷹扇は品のない連中が多いようでして。それにあそこは男子高で、羽深の希望がまた一緒の学校に行きたいという話だね。まあ、良いかと思いまして。」

「本当かオイ？彩香食ったら殺すぞ。お前の毒牙に刺さらないようにわざわざ幼なじみにしたんだからな。」

「はあ？いや何でいきなり彩香の話になるんです？まあ、近くだし会うことは増えるでしょうが。」

「……。お前知らないのか？彩香は、ああ、そっぴやお前知ってる

子だと悠季もだが、聖フランチエスカだぞ。」

んなバカな。そんな話を知らんはずが……。まさか

「あの2人が通ってる学校を聞いてなかったのは迂闊でしたが、まあ、ある意味やりやすくなりますよ。」

「ほう……。そんなに殺されたいのか。それはありがたい申し出だな。」

「逆ですよ。あの2人とは清算しておきたいんですよ。その後奪うかは知りませんが。」

「フン、相変わらず可愛くないやつだな。まあいい。1日に例の場で食事会だというのは忘れていないだろうな？、まあ、むこうのいつものメンバーとだからつまらんかもしれないが。ああ、暇があればあと一人くらい来るかもしれないが、可能性は低いな。今のところ。俺の用件は今の2つの確認だ。ついでに寄ったんだ。今から向こう戻ったら久々にゆったりだ。家の準備できたら招待しろよ。」

「わかってますよ。いつもお疲れ様です。父様の後始末は大変でしょう。斎藤君一人ではどうしても力バーできないところがありますし。家は彩香に気づかないようにさえすればいつでも構わないですよ。しかし……。ああ、何でもないですよ。」

この人の手助けがあるから斎藤君が死なずにすんでるようなものだからね。本当に頭が下がる。

しかし、妙に話が出来すぎているな……。

この私にとって都合の良い合併話は斎藤君から聞いたものだが、よく考えればあの零寛の爺さんが大して儲かるはずもないところに金を出し、わざわざ共学化するとはなかなか考えにくい。とはいえ、私が羽深との間で困っていることをあの爺さんが知る筈がない。

とはいえ、その学校には彩香と悠季までいる。とくれば……これが単なる偶然である筈はない。まあ、カマをかければそれで終わる話だし、1日にゲストは揃う。

それより引っ越した。引っ越し。まあ、学用品以外は向こうで買えば済む話だから大した量じゃないが。

問題は犬だけだ。カイかマックスのどちらかは番犬として残さなきゃいけないが、半年や1年で交代させるような真似はできないし。

今回はマックスにするか。カイのほうが普通の人は怖いだろうし、母様はカイのほうが好みだしね。

コンコン

「羽深、いるか？」

「はい、兄様。ちょっとお待ちください。」

少し待つと、出てきた。

「どうか致しましたか？もう入学手続きの書も委任状も父様と母様の承諾書も兄様に渡した筈ですけど。」

「ん、ああ、マックスとフルールは早めに連れて行って一度向こうの獣医さんに診て貰わなくてはならないから、今から一度愛知まで行ってくるから、一応と思ってね。もう予防接種は打ったけど、畜犬登録はまだだし、狂犬病は向こうで打つから。へりだから1時間くらいだよ。まあ、途中であの子たちのストレス解消ができないのは心配ではあるけど。」

「今からですか！？てつきり明日一緒に行くのかと思ってましたが。」

「明後日には帰るかな。父様の名古屋出張がその日だから、その日に合わせるのは当然だけど、向こうの部屋の用意をしておかなきゃいけないからね。」

「わかりました。では私も行きます。すぐ支度をするので待って貰えますか？」

「まあ、そうだろうとは思ってたけど。んじゃ30分後に正門でな。」

「はい。」

そして、何事もなく中部空港へ到着。ここからは車だが、久々にアレに会うのはどうもなあ……。すこし息抜きの散歩をして、終わっ

て戻ると開口一番、

「ところで、こちらでは誰がお迎えくださるんです？楠原さんですか？」

「いや、お前の」

一番会いたがっている人物だよ。と言おうとしたところ、途中で遮られる。

「私わたくしですよ。お久しぶりです。章人さま。それに羽深ちゃんも久しぶりね。しかし、人をつかまえてアレだのコレだのはないでしょう。私はバケモノか何かですか？」

ある意味そうだよ……。と言いたかったが、まあここは我慢、我慢。何せ哑然としている我が妹がいるのだから。

「千、千砂お姉ちゃん……。？どうして？」

「どうしてもこうしても、こっちに住んでるのよ？まして久々の羽深ちゃんなんだから。」

……………。

先日の電話で、「なら羽深ちゃんも連れてきてください。でなければ1日まで迎えには行きません。あの子も必ず行きたがるはずです。」

「と半ば脅されたのだが……。まあいいか。」

「わーい。久々の千砂お姉ちゃんだ！ねえねえ、マックスとフルー
ルもいるんだよ！！」

はしゃぎまくりの妹。何故母様の前ではともかく、私の前でも普段
はどこか堅いのになコレが居るといきなり砕けるんだ？

「あらあら。元気にしてた？」

とバリケンを覗きこみながら言う。あのな、100%気づいてたぞ。
というかその為にわざわざ空港来て貰ったんだから。多分さつき息
抜きの散歩したのも見てたろうし。

それでもコイツらも大喜び。バリケンが壊れる……。とりあえずま
た出してやるか？

「しかし、注文通り大きいので来てくれたねえ。それでも2人しか
乗れないんだがな……。」

しかし、どうすんの？羽深連れてくれば1人余るのはわかっていた
筈。私にはタクシーで行けとでも？

「元氣そうね。お正月以来かしら。」

「わー。遙さんまで来てくれた。」

なんでこの人選なんだろう？折角夫がのんびり休めると帰ったそ
の日に。しかも、夫は30分前くらいに着いたばかりの筈。わざわざ

ざ不興を買つ必要もあるまいに。私の折檻はそんなに面白いのですか。そうですか。

「今はみんな忙しいのよ。零寛さんと柳黎さんは特に残念がつていたわよ。あの人も仕方なく送り出してくれたわ。」

その程度は言われるまでもなくわかるが。決算が今だとわからない私ではない。

零寛の爺さんは”最大の楽しみはコイツをからかうことだ”と言って憚らないし、柳黎会長は頭は融資の話で一杯だろうからなあ……。まあ、筋は通ってるんだが。どうも釈然としない。

「わざわざ助かりましたよ。まあ、今日はすぐ帰って頂かないとあとでまた言われますからそこは頼みますよ。」

「はいはい。にしてもあの人は彩香のことになると神経尖らせすぎなのよねえ。君に食べられるなら随分ありがたい話だと思っただけど。」

「まあ、可愛くて仕方ないんでしょうね。私ですらそうなんですから。骨抜きにされますよ。だからこそ、そう簡単に頂くつもりはないんですが。」

相変わらず肝の据わった方というか何というか……。ペースを掴めないんだよ、このお方は。

「まあ、あの人や君の言うこともよくわかるけどね。さ、着いたわよ。」

名古屋城まで徒歩数分。学園までは地下鉄で約20分。地下鉄の駅からは徒歩3分ほど。まったく都合いいところに造ってくれたよ。まあ、我が系列なのだから当然といえば当然だが。

章人Side 第1話 再会？（後書き）

恋姫のほうは水曜までに投稿できればいいな……と思っています。

こっちの思っているところまではなかなか進まないなので遅くなつて
ます。

こっちはどうだかわかりません。

1話目の投稿がようやく完了致しましたので、感想、評価等自由にお書きくださって構いませんよ。お待たせしました。

章人Side 第2話 出会いは時として……。 (前書き)

学校生活始まるまで何話使うのか、戦々恐々してます (笑)

章人Side 第2話 出会いは時として……。

「ここ……ですか？」

「ええ、40階建ての高層マンションよ。部屋は25階だけど。」

「えー、もうちょっと上がよかったです。」

まあ、それは私もそうだが、

「仕方ないだろ、条件に合って一番高いのが25階だったんだから。」

「条件って？」

「私の部屋と羽深の部屋がそれぞれ2つ。マックスとフルールで1室、来客用の客間1つ、そして仕事の部屋が1つに千砂くんの部屋を1つ、合わせて8LDK以上の部屋だからな。あと交通の便がいいこと。25階だとフロア全部で1部屋なんだ。そんな部屋は15・20・25階のみだからな。それ以上高いところは3LDKとかで分譲したほうが捌けるしね。」

「まあ、普通は高すぎて買えませんよね。20億くらいでしたっけ？ましてや賃貸無しで分譲のみですから。」

「そ、それを兄様や千砂お姉ちゃんが探したのですか！？」

「いや、条件に合うとどこか探してくれと不動産の連中に頼んだら、ここはどうかかと。この程度、千砂くんに任せるようなこと

じゃないよ。まあ、インテリアの半分は任せただけだね。さて、まずは食事かな。」

まだ色々残ってるけど、2時近いし。そして、食事と荷物整理が終了了。

羽深は疲れたか部屋で休んでる。

「お散歩ですか？」

「ああ、習慣はそう簡単には抜けない。しかし、相変わらず料理も上手いもんだ。食後のデザートもね。羽深は中華はあまり食べたがらないが、プロの料理だけは食べるからねえ。」

「誰かさんに仕込まれたからでしょう。まあ、あの子たちに遇わないようにお気をつけくださいね。」

「ま、その時はその時かな。2時間走ればどっちかに遇わないとも限らないよ。」

1頭ずつそれぞれ1時間。きちんとランニングするようになったのはいつからか。やればやるほど他との差はつく。でも、負けた時に”練習で手を抜いていたから”などとは言いたくないからね。

結局問題なく帰宅。それぞれ足洗うから、結局3時間ほどかかってしまう。もう夕暮れだ。

「お疲れ様です。夕食も作りましょうか？」

「いや、たまには私もやらないと腕が錆びるよ。羽深は？」

「さっきまで寝てましたが、今はマックスと戯れています。ではお言葉に甘えてそろそろお暇させていただきましょうか。」

「ああ、明日からは泊まってもらうのだから、今日はあと羽を休めてくれ。また色々苦勞をかけるようになりそうだから、束の間の休息にしかないだろうけど。羽深！そろそろ千砂くんが帰るそうだ。お見送りしよう。」

「えっ。ずっと居てくれるのではないのですか？」

「明日以降は泊まってくれるそうだが、今日はな。彼女にはこっちは家族が居るんだし、そんなに引き留めるわけにはね。」

「……。わかりました。」

明らかに不服そうだが、不承不承頷いてくれる。

「大丈夫よ、羽深ちゃん。明日からはこっちに居るから。」

「明日またな。」

「はい。」

「さて、先にお風呂貰うぞ。さすがに汗だくだ。しかし、明日からまた来るんだからそんなに気落ちしなくても大丈夫だよ。これから近くに住んでるわけだし、いつでも会えるさ。」

「でも、折角千砂お姉ちゃんに久しぶりに会えたのに荷物整理で疲

れてあまり喋れなくて……。」

「そのかわり随分手伝って貰えたんだからいいじゃないか。」

私は全て自分でやったんですがね……。

そして、入浴、食事とすませて、9時。

久々にのんびりできたかな。羽深も母様がいないとけっこう喋るからねえ。

「兄様、明日の予定はこの子たちを獣医さんのところに連れて行く以外はありますか？」

「いや、特にない。それも午前中だから、あとはゆっくりだな。どこか行きたいところでもあるのか？」

「いえ、たまには3人でのんびりおしゃべりでもできたらと思いついて。」

「そうか、それはいいな。明日の朝は寝坊してもいいぞ。また誰か頼むわけにもいかなから、お前は連れて行けないしな。」

そして、翌々日。3月29日木曜日。

ようやく、学校に行く日か。といっても、あくまで最後の手続きの

ために行くだけなんだが。

「さて、私は先に行かせて貰うよ。父様が学校に来るのは11時半だが、その前に学校を見ておきたいんでね。羽深は11時までには来なさいよ。」

「はい！それまで千砂さんとお喋りして、学校まで一緒に地下鉄でつれてってもらいます！」

「はいはい。まあ、ちゃんと路線覚えときなさいよ。明日は学校の寮の荷物も整理に行くんだから。お前が成績優秀だったから1LDKの部屋だそうだが、それでも狭いだろうからな。少なくともここよりは。」

「章人さまも迷わずに行ってくださいね。」

何をバカな……。

と思っていたら、迷った。まあ、気の赴くまま適当に歩いていたらなんだが。あと30分で11時だ。こういうトコで地図見るのは好かんし。にしても何故短大部 幼稚舎 教会の順で建ってるんだ……？という設計方針なんだろうか？

革靴はカバンに入れておいてよかったな。お、生徒？発見。訊くか。

「すみません、ちょっとよろしいですか？」

「どうかした？」

ん？ずいぶん険悪というか、敵視してるというか、妙な子だねえ。

「あ、いえ道を教えて頂きたくて。今年から転校してきたんですが、広いというのでむこうからいろいろまわってたらこんなところに出てしまいました。」

「そう……。でどこ行きたいのかな？キミは？見たところ高等部みたいけど」

気のせいかな……？しかし、どこかで見たことがあるような感じがするな。

「そうです。職員室までの道なんですが。」

「ん、ここからだとも30分くらいかかるよ。時間は大丈夫？」

「ええ、予定の時間にはあと1時間ほどありますし。まあ、11時までにはそこに着いておきたいですが。」

「へえ。ずいぶん早く来たんだね。途中まで送っていつてあげようか。ついでだし。」

「ありがとうございます。先輩ですよね？」

「ええ。今年から3年よ。てことはキミは……？」

「私は2年です。まだクラスは聞いてないですが。早坂章人といい

ます。」

「3・2の松原怜架よ。しかし、正門からくらは突き当たって右行けばすぐなのに、どうしてこんなところ居るのやら。」

あの爺さんの孫か。どうりで。しかし、またもや……か。全く羨ましい限りだな。

「一応正門からは来たんですが、一応全部見ておこうと思って短大部のほうに行ってそのまま幼稚園と教会みて散歩したらいつの間にか迷ってまして……。」

「アラアラ、随分回り道してきたのね。キミ変わってるとか言わない？」

「コレは手厳しいですね。まあ、言われないこともないですが。」

「まあ、いいけど。あとまっすぐ行くだけよ。私の待ち合わせはここだから。」

「そうですか。ありがとうございます。ん、アレは……。百草サン？」

「え？」

「やっぱり君だったわね。同姓同名の別人かと思ったけど、写真も経歴も君のものだったし、どうしてこんなところ来たのやら？　ところで、私は教員やってるから”さん”は困るわね。」

「ああ、すいません。”先生”。しかし、こっちも同じ疑問をその

ままお伺いしたいですが。将来を嘱望されてた方がこんなところで教師とは。まあ、一回くらい試合してみたかったですから、ある意味ありがたいですけど。」

「……。多分君と似た理由よ。それに、ここで教員やってるほうが昔より楽しいし。まあ、そのうち試合はしたげるわよ。ウチの先生がてぐすねひいて待つてるから、最後かもしれないけど。」

「そら怖い。まあ、待つとしますよ。おや、来てたか、羽深。松原先輩、ここまでありがとうございました。またお会いできるといいですね。百草先生もまた。」

「ええ……。」

「まあ、楽しみにしてるわよ。またね。」

「兄様！結局兄様が遅刻じゃないですか！！全く！」

「む……。まだ3分あるじゃないか。父様が来るまではどうせ15分はあるだろうし……。」

「いや、もう来ているぞ。書類の確認をしてほしくてな。」

「こりゃびつくり。やられたな……。」

「とりあえず靴替えますから待つてください。あと、こんなところ

で書類整理はしないでください。紙が飛ばされたらどうするんですか。」

そして問題なく入学許可。父様は多忙なのでお帰りに。羽深は成績トップ入学なので、代表の挨拶を命じられ、今その文言を考えてます。ちなみに別の部屋で担任と。羽深の担任は米原先生という先生でした。雑誌で紹介されてたのに忘れてたんですが、百草先生の腰巾着だった方です。結構な実力者だったと記憶、まだ百草先生を追っかけ続け、この学校へ。今はテニス部の顧問してるそうです。ちなみに、担当は英語だそうです。

私は　来月の21・22の土日に愛知のバスケNo.1を決める大会があるらしく、その勧誘をされてます。

なんでも、この学校の教師で組んだチームで何度も大会には出てるんだそうですが、毎年強豪3チーム（社会人×2と鷹扇らしい）に負けるので助っ人が欲しいとのこと。負ける気はしませんが、彩香たちと遊びたいし、どうしたものか。

「先生方、無理強いは良くないと思いますが。」

「大神先生は生徒思いですからねえ。しかし、我らの負けっ放しもそろそろ卒業したいですからな。ここは何としても……といったところですよ。まあ、前日まで3日連続で地獄の体力測定もあるし、迷う気持ちもわかるがなあ。」

それは大して問題ではないのですが……。まあいいか。

「兄様、こちらは終わりましたが。」

「羽深ちゃんはさすがに入学試験トップだったことはあるわね。文章も問題なくできてるわよ。」

「お疲れ様。米原先生もありがとうございました。大会の件ですが、16日の月曜までには結論いたしますので、それまでもう少し考えさせてください。ポジション自体は一応どこでもできますので。では、今日は失礼します。大神先生、そして他の先生方もこれからよろしく願います。」

「わかりました。では、先生方も大会の話はその時にということではよろしいですね？9日の月曜日、入学式でお会いしましょう。11日から3日連続で最初の試験がありますので、きちんと勉強してください。成績上位20名は高等部前の掲示板に公表されますからね。」

「はい。では失礼致しました。」

と言って頭を下げ、職員室を後にする。羽深も続く。

「どうだった？この学校の第一印象は。」

「はい、米原先生は優しい先生でしたし、楽しくやれそうです。そういうえば、兄様は来る前に誰かと話されていましたね？」

「それは何よりだ。あの伝説の10連覇、”四天王”の1人の百草

先生と、道を教えてもらった松原先輩という先輩だよ。」

「迷うな」と人に言っておいて自分が迷ったのですか……。」

「気の向くままに歩いていて、だけのつもりだったんだがな。それよりあの時間に父様が来たのはやはり千砂くんが呼んだのかい？」

「その悪癖はいつになったら直るのですか……。探求心が旺盛なのは良いことだと思いますが。ええ、千砂お姉ちゃんが兄様を驚かせようということだ。」

こうなるのも予想してたんだろうな。相変わらず困ったもんだ……。

「やれやれ、まあ、仕方ないな。さて、これからどうする？」

「兄様さえよければですが、寮の下見に行きませんか？一応昼間で寮母の方の了承さえあれば血縁者は入れて良いということだったの。今日明日は寮母の方はいらっしやらないそうですが、入る入らないにかかわらず一応今日も許可はだして頂いたんです。米原先生に頼んで。」

「構わないよ。ただ、他の学生さんは居ないんだろうね？まあ、居てもいいけど不審者扱いには御免だよ。」

「殆どの方は来週に荷物入れをなさるそうです。一応今週しても問題はないそうなので、何人かはいらっしやるかもしれませぬね。」

幸運にも誰もいなくて済んだ。そのせいか荷物の整理も手伝わされてしまったが。それなりに広い部屋だったのに、何故ぬいぐるみと写真で埋め尽くされるんだろうか？机と教科書に参考書、あとは小説数冊とノートPC以外は全てぬいぐるみ……。

制服と私服数点以外は服は無し。他の服や参考書、おまけに小説まで全て私の部屋に置かれるのはやはりどうかとは思うんだが、まあ、趣味だから仕方ないとしか言いようがないんだよな。他にお金ほとんど使わないから貯金は3ケタあるし。万の位で。

そして、つつがなく全て終了。

あとは1日の会合を残すのみ。羽深は翌日30日に一度実家へ帰宅。千砂くんと別れは嫌がつていたが、またすぐ会えるといってなんとか帰宅。

「相変わらず羽深にも大人気だな。しかし、あまり人気すぎるのも困りものだな。」

「あら、まさか嫉妬ですか？それは嬉しい限りです。しかし、確かに羽深ちゃんに好かれすぎるのはある意味問題ですね。あの子はどうも依存心が強いですから。」

「無論その感情もあるが、羽深がねえ……。 ”新天地”で上手くやってくれるといいんだけど。それに、君と斎藤君が抜かれたらどうなるかをまさかわかっていない訳じゃないだろう？ まあ、その時

は私や会社には未来がなかったということなのだろうがね。

ああ、そうそう、昨日面白い子に遇ったよ。」

「まあ、私は私の道^{わたし}を往くだけです。それが誰と重なっているかは誰よりお分かりでしょう。しかし、面白い子とは誰です？」

「ああ、松原怜架という子だよ。1年先輩のようだが。しかし……松原の傑物伝説は4代で終わると思っていたんだが、まさか5代まで続くとは、羨ましいもんだ。秘伝の褥の上の技でもあるのかね？あの家には。それに、彼女はある意味君以上だ。」

「それは興味深いですね。して、私以上とは？」

「ん？ああ、ただ運動も相当できるというだけの話だが。それ以外で君が劣るものはないよ。しかし……。」

「どうかされましたか？」

「零寛の爺さんもずいぶん酷な育て方をしたもんだ。まあ、それしかしょうがなかったのかもしれないが。」第二の悠季”にせずともよかったろうに。」

「それはそれは、私もお会いするのが楽し^{わたし}みになってきましたね。いつ訪れるかはまあ、知りませんが。」

まあ、まず間違いなく知っているだろうにここまで惚けるとは相当の狸だな。全く。大人しく狐になってりや可愛いものを、最古の古

狸レベルだから困ったものだ。

章人Side 第2話 出会いは時として……。 (後書き)

今作はちょっとしたテストも含んでいます。

かなりの文章が会話文で構成されているという。

いかがでしょうか？

一応日付は現実の2001年に合わせた(ハズ)です。偶然上手くいったので。

怜架Side 第1話 全国への道（前書き）

もう1話主人公の視線からの話入れてから書こうかとも思っていたんですが、やっぱりこっち先に書きたくなりました。

こちらは普通の小説の書き方に近いと思いますがどうでしょうか？

怜架Side 第1話 全国への道

どうも気が進まないわね……。顧問が変わるって話は終業式の前に聞いて、部活が始まる前に部長のあなたとは意見交換というか方針の説明をする……

という話はされてたけど、いきなり昨日、メールで「明日午前11時に学校前の広場に来て」だしね……。

経歴はともかく、去年バスケット部の顧問やった時はなんの変化もなく初戦敗退だったし、本当に大丈夫なのかしらね、この先生に今年のコーチ任せて。私がIH行く最後のチャンスに。

まあ、最初っからすっぱかすのもどうかと思うし、とりあえず行きますか。

と思っていると、私？を呼ぶ声が。男？どうも好かないのだけれど。

……。

特徴は、長身痩躯。ただそれだけ。でも、これまで会ってきた男とは何となく違う気がする。とはいえ、私を見ているようで私の中の”何か”を見ているような感じ。

どうも読めないというか……まあ、今何か聞いたところでのらりくらりとかわされそうだけど。雰囲気がお祖父様そっくりだから。

しかし、”早坂”ねえ。彩香の彼氏がそんな名字じゃなかったかな……。まあ、午後から会ったから聞けばいいだけねと。

「あれ、アレは……。百草サン？」

知り合い？

そして私をおいてけぼりにした会話スタート。どうやら百草先生の経歴は本当らしい……。

そして妹に「兄様」と呼ばせるってどうなのよ？よく分からないけど、普通じゃなさそうなことだけは確かね。

「百草先生、今の人と知り合いですか？」

「まあ、知り合いみたいなモノではあるかもね。面と向かって話すのは初めてだけど。向こうも知ってるってことはやっぱり何かで読んだのかな。」

「読んだ？」

「ええ。あの子のことはよく雑誌でも特集されてたから。去年の国体にも出てたしね。」

雑誌！？いや、どんな奴よそれ？如月も多分雑誌なんて載ったことはないわよ。まあ、剣道だけど……。

「やっぱりテニスですか？あんな細身なのに？」

「さあ……？あの子は何でもできるみたいだけど。雑誌に載ったのはテニスとバスケ。私が生で見たのは去年の国体のバスケ都道府県対抗戦。」

そう言って首をすくめる百草先生。……意味が分からないんですけど。

「何ですかそれは？百草先生、冗談にしては笑えないんですけど。」

「いやね……私も実際に見るまでは信じられなかったけど。特別なことは何もしない、ただ基本の動作にしか見えないプレイをするだけだったわ。」

一昨年まで3年間、全中制覇の原動力になってしかも去年もIH制覇した愛知の天才、藤田君擁する愛知代表と東京代表の試合が去年の国体の準決勝。それを見て分かったのよ。あまりに圧倒的だったわ。

その子を一回は見せたくてね。だから今日わざわざ呼んだのよ。もしかしたら見られるかも……っていうのでね。」

「百草先生って意外とミーハーなんですわ……。でも、そんな表現

「じゃぜんぜん分らないんですけど。」

「まあ、アレは見ないとわからないわね。一応見ておいて欲しかったのよ。あの子ともう一人、藤田君もこの学校に来るから。何の因果やら。ここだけの話、二人とも転入試験で満点とったしね。そういう意味でも普通じゃないから。」

そんな話を一般生徒の私にしているのかしらね……。というか、

「あの、百草先生、まさかわざわざ彼を見るためだけに私を呼んだんですか？」

「まあ、それもあるけど。最大の理由は、今年キミ達水泳部はIHに行く気で練習するつもりがあるのかってこと。少なくとも部長のあなたには確認しておきたかったから。」

「そんなの当たり前じゃないですか！！何をいきなり！！」

去年見事に失敗したお方から言われたくないんですが！と言っのを何とかこらえ、

「それはつまり、部員が半分くらい減ってもいいということ？」

去年、バスケット部の子たちは仲良し小好しでやりたいと言ったの。実力至上主義は嫌だつてね。ましてや練習量を増やしてついていけない子は切り捨てるようなやり方は嫌だつてね。だから、私はそれほど指導はしなかった。それは勝つ気がないってことだから。

キミ達の結果と大会の映像は見せて貰ったけど、正直、あなたを”様”付けで呼んでただあなたに寄りかかるだけのチームで全国には行けはしないわ。」

な……。いきなりそんなこと言われても……。部員に悪い子はいない筈だし……。

「おまけに言うと、協調性は+にだけ働くわけじゃないわ。厳しい練習を放り出す子が居ると、それにつられてやめる子が増え、結果として練習をする前に戻っちゃう。」

確かに、あなたはかなりの潜在能力を持つてる。でも、今の環境ではそれが生かされることはないわね。多分自分の練習すらきちんとやれてないでしょ？まさか個人戦はメドレーにしかエースが出ない、いや、出さないなんてバカなことやってるとは思わなかったわ。このままじゃどうしようもないわよ。」

そう言っただけ呆れたようなため息をつく百草先生。にしても、いきなり過ぎて頭が上手くついて行かない……。

「じゃ、じゃあどうしろっていうんですか!？」

「まず、あなたにキツイ練習をしてIHに行く覚悟があるのかってこと。キャプテンが駄目だと他の子もだめになるから。その上で、あなたにとって最適な種目を決めること。あとはレギュラーね。」

一番近いのは平泳ぎの有瀬さんかしらね。あとは織戸さんが背泳ぎに転向してくれればその2つの種目は固まらないこともないんだけど

ど・・・。

ミーティングで全員共通で全国行きたいから練習ハードにしてもいいって意志が統一されてそのままひとりも欠けずに地区大会予選までいければある程度は流れで何とかなるような気もするけど……。」

「ある程度というのは？」

「中部地区大会。全国は別の領域なのよ。ましてや、過去誰も行ったことないチームでは。運じゃカバーできないから。」

この先生は実は凄いみたいだけど……。

にしても、そこまで私の役割を強調するのはどういう意図があるのかしら。

「キャプテンの役割が重いつていうのはよく分かってるつもりですけど……。」

「”つもり”じゃダメなのよ。愛知vs東京で愛知が負けた理由は単純、藤田君という精神的支柱かつエースが完全に早坂君に抑え込まれたこと。彼に頼ってたチームだったからそれで負けちゃったわけ。」

それでも高校では何とか冬の選抜で全国優勝にまでこぎつけたんだからやっぱり彼も相当の実力者だけだね。

もし、あなたがそうになったらチームの負けは確定。あなたがその重

圧に耐えて自分の力をきちんと出せばかなり結果も変わるんだけど。」

重いわね……。昔から何度も個人の大会では色々優勝してたけど。さすがに、チームの命運がかつてるとか言われると……。

怜架Side 第1話 全国への道（後書き）

注）これは青春スポーツ小説ではない（はず）です。

怜架Side 第2話 昼食会（前書き）

この度、誠に勝手ながら全文の改訂と一部のタイトルの変更を行わせていただきました。”……”「三点リーダー」とか”「ダッシュ」の表記を間違っていた（恥ずかしながら知らなかった）為です。

前書きが長くなったのは二次創作な為、原作との違いを知ってもらう。あるいは原作を知らなくても読めるようにするため……。と無理矢理納得しています。読者の皆様をそう思っていたければ幸いです。

読まなくても一応本文だけで読めるようにはなってる筈なので。

最初からヒロインが誰になるか暴露するというあるまじき？凶行に走ったのは、主人公2人制（ホントは陰の主人公もいて主人公は3人いるようなつもりで書いていますが）のような感じで書くことにしたので、すぐ分かるだろうな。というのと、”誰とくつつくのか？”より”どうやってくつつくのか”に焦点を合わせて読んでいたきたい為でもあります。

怜架Side 第2話 昼食会

「それじゃ、これで私の話は終わり。再来週の月曜から学校は始まる。でも厄介なことに、その後2週間はテストと体力測定で部活動は一切禁止。それまでは基礎体力の向上と柔軟をがんばっておきなさいな。あと、自主練用の水着を買っておきなさいよ。」

「わかりました。でも、水着くらいもっ持ってますよ……？」

この先生は何を言ってるんだろうか？

「本気で全国狙いたいなら、水着を1・2ヶ月で交換するくらいのペースで泳がなきゃダメなの。ミーティングしたらその後水着注文して部費で落としてあげられるけど、学校始まるまでは無理だからそれまではとりあえず週10kmくらいは泳いでおいてね。あと、体力テストのシャトルランでは女子のトップに必ずなること。目安は140。」

アレ本当に大変なのよね……。去年はたしか120前後だったかな。しかし、本当に”ふるい落し”なのね。私が先頭に立つのはもちろんとして、みんな残れるわよね……。

「わかりました。今日はいろいろありがとうございます。正直、先生が顧問で大丈夫かと思ってたんですが、大丈夫じゃないのは私たちのほうだったんですね……。でも、絶対ついて行きますから。」

「期待してるわよ。あ、そうそう、できればあんまり早坂君や藤田君とはお近づきにならない方がいいかもしれないわね……。まあ、あなたの判断に任せるけど。」

？ 別に悪い人じゃなさそうだけど。何かあるのかしら？

「先生、それはどういうことなんですか？」

「……。なんて言ったらいいかしらね……。 ”才能の差” っていうのかな。あなたはたしかにかなり良いモノを持つてる。上手く磨けばルビーやサファイア、ダイアモンドになるような才能の原石^{かけら}を。でも、あの二人はもうそれが完成されてる。はつきり言っただけ元なの。あまりの差に絶望して、それがあなたにとって - にならないか心配なのよ。あなたはまだまだこれからだから。今ある才能が彼らによって逆に妨げられないかな……。 ってね。」

「それなら大丈夫です。もう、吹っ切れましたから。」

「そう、ならいいわ。彼らの力の一番のすごさはその ”精神力” 。あなたも学び取りなさい。私にそれだけ言えるのなら。」

「はい！ ！」

こうして、百草先生との対面は終了。正直、予想外だったけど嬉しいな。先生があんなに厳しいのも、本気で全国に行けそうな気がするのも。

”別次元”か。午後から彩香たちとご飯食べるから、その時それとなく聞いてみようかしらね。まあ、同一人物だという保証はないけど。

そして自宅に戻って着替えてまた出かける。

彩香の家で食事&お喋り&お茶会。

彩香のお母さん、遙さんは料理の腕も何もかも天下一品。楽しみ……と思いながら玄関のチャイムを押す。

「あら、いらつしゃい怜架ちゃん。彩香たちも待つてるわよ。今日は面白い子も来てるわよ。」

面白い子……？招かれるがまま、いつもの部屋へ。すると、まさかの珍客、如月が居た。てつきり、沙織と皐月だけだと思ってたんだけど……。如月は遙さんがあんまり得意じゃないみたいだし……。そして皐月がいない。

「いらつしゃい。怜架ちゃん、元気してた？」

「久方振りでごさるな、怜架殿も変わりはないか？」

「よ、怜架。元氣そうじゃん。」

「如月が居るなんて珍しいわね。皇月はどうしたの？」

「如月ちゃんは何か聞きたいことがあつて来たんだって。皇月ちゃんは何は

『あなたのノロケ話はもう聞き飽きたわ。』

だつて。ひどいよ。」

ブクーと膨れる彩香。まあ、確かにねえ……。これまで話半分にか聞いてこなかったけど、いわゆる”虫も殺さぬ聖人君子”とか、そんな話だったからね……。そんなの居るかっての。

とはいえ、午前中の”彼”と同一人物の可能性が高いから、こつそり情報収集しようかしらね。それに、その人のことを彩香が話す時は何となく”陰”があるような気がするし。それが何なのか気になる。

「……。これまで、彩香殿の彼氏の話は正直、聞き流しておった。じゃが、祖父殿に

『お主の追い求めとる男と近いうちに会えそうじゃ。そういえば名も教えておらんかったの』

と言われ、そ奴の名を教えて貰ったのじゃが、それが彩香殿の彼氏の名と同じことに気づいての。ご一緒させて頂くことにしたのじゃ。

「

はあ？ あの男、如月にも手え出してたわけ？

「むー。如月ちゃんも酷いですー。……？ 章人さんがどうかしたんですか？ というか、”まだ”彼氏じゃないんです……。」「

そういつてうなだれる彩香。あれ、彼氏じゃなかったの？

と、「そろそろお昼作ってもいいかしらー？」

と居間のほうから声が飛んできた。ちょうどお腹すいてきたとこだし、と思うと、

「おねがいしまーす。あと、いつものジュースも一緒に」

「はいはい、わかってるわよー。」「

沙織が勝手に頼んじやった……。にしても、ここまでの無礼講。遙さんじゃなかったら一体どうなるのかしらね……。？

「いつものジュース？ 沙織殿、それは？」

「あれ、如月飲んだことなかった？ 毎回何が出てくるか分からないんだけど、絞りたてのジュースを出してくれるのよ。正直、黎明館でも”千砂スペシャル”以外では勝ち目がないわね。それより、その男の話聞かせなさいよ。早坂君だっけ？」

確かに……。遙さんの料理は下手なレストランよりも美味しい。黎明館もかなり美味しいけど……。確かにアレ以外なら遙さんのほうが美味しい。あっちは値段もものすごいけど。それより……。

「それ、私も気になるわ。何なの如月？」

「う、うむ……。正直、他の者に話しても馬鹿にされるか逆に怒りを買うかのどちらかじゃろうかで誰にも言^いったことはなかったのじやが……。それがしが幼少の頃より祖父殿に直々に剣道の稽古をつけて貰^{もら}っておったのはお主らも知^しっておるよな？」

「ん、一応は。不動なんたら流だっけ？ なんか長話の予感。」

「沙織殿、お主から聞いておいてそれはないでござろう！！不動神^{ふゆるぎしん}影流^{かげりゅう}じゃー！！」

「まあまあ、如月も落ち着いて。沙織、さすがに失礼よ。」

「ハハハ、ゴメンゴメン。」

まあ、たしかに如月ほどからかいがいのある子は居ないんだけど……。

「それで、それが章人さんとうとう関わりがあるんですか？」

ワクワク、といった感じでさっきから聞いている彩香。

「うむ。それ故、道場にも大会にもそれがしの相手になる者など誰もおらんかった。」

そんな時、あの男に出会ったのじゃ、今でもありありと思い出せる。7年前、この名古屋で行われた剣道の全国大会。それがしが小学6年の時じゃ。小学生女子の部で優勝し、その後申し込まれた男子の部の優勝者も正直に言^ゆってそれがしの相手にはならなかった。その時、祖父殿があのお男を連れてきたのじゃ。

そして、どうせそれがしになど勝てぬだろうと半ば諦めの気持ちを持ちつつも、祖父殿が

『本気でやるのだぞ。』

と言^いったのでな、どうせならそ奴になどふれさせぬようにして勝ってみせると意気込んで試合をしたのじゃ……。」「

「まさか……。」

思わずそう漏らす私。何となく結末が見えた。

「うむ……。結果はそれがしが一度もふれられず5連続で一本とられて負けてな。悔しくて悔しくて、もう一度試合をさせると土下座してな、それでも結果は変わらずじゃった。それがしには何もさせてもらえなかった……。」

そ奴がそれがしの一つ下の小学5年生なのに、高校生以下の部で優勝したのじゃと知ったのは後のことじゃったが……。

今でもあのときあ奴から言われた言葉は今も一言一句違わずに覚えている。

『今の君じゃ、千回しようとも一万回やろうとも私にふれることすらもできないよ。もっと強くなったら、また試合をしてあげるよ。無論、また私が完膚無きまで叩きのめしてあげるけどね。』

そう言われたのじゃ。それがしが、

『名前を教えるのじゃ!!』

と半泣きで言^いったのじゃが、

『時が来たら君のお祖父さんから教えて貰えるようにしておいてあげるよ。それまできちんと練習してもっと強くなるんだよ。』

と答えはにべもなかった。あの日は家に帰ってからずっと泣い
た。祖父殿が、あの男には私ですら勝てぬと言うつたが……。一
体何をすればああまで強くなるのか……。あれからも欠かさず修練
は積んできたが、正直に言^いうてあの時のあ奴にすら勝てる気はせぬ
……。

今まで片時も忘れたことなどなかったのじゃが、昨日の夜、突然、
祖父殿が名を覚えてくれてな。『近いうちに会える』と言ったのじ
ゃ。」

……。まあ、何となく分からないでもないけど、あの如月がねえ…
…。

啞然とする沙織と対照的に怒ったような彩香。

「章人さんはそんな酷いこと言いません!!」

「む……。しかし……。まあ、同一人物とは限らんのじゃが……。
」

「あらあら、みんなどうしたの？ 今日^{けふ}は明太子のスパゲティと牛
乳よ。ジュースは後で持ってきてあげるわ。あと、今日は久しぶり
に良い紅茶が手に入ったから、それも楽しみにしててね。」

ナイスタイミングでお昼を持ってきてくれる遙さん。

「じゃ、とりあえずお昼貰っちゃいましょうか。しかし、いつもながら美味しいわね。全く、彩香はいつもこういうのが食べられるなんて羨ましいわよ。」

と零す沙織。確かに……。沙織のお母さんはかなり忙しいから昼どころか三食とも自分で作るか食べに行くかだって前に嘆いてたものね……。ウチも忙しいときはそうなるけど。

「見事なパスタでござるな……。確かに沙織殿が好きになる理由もわかるの……。それがしの家には料理人が居るが、こういう家庭的というか、心が温かくなるような料理は食べられぬ……。」

「おかわりおねがいします。」

感嘆する如月と早くもおかわりする沙織。いくらなんでもペース早すぎじゃないかしら？しかし、パスタはともかく、この牛乳の濃厚さっていかにおいしさは何なのかしら？

「はい、どうぞ。あとこれしかないから、ここに置いておくわね。沙織ちゃん、独り占めしちゃダメよ。」

「あの、遙さん、この牛乳は何なんですか？」

「？ ただの牛乳だけど？」

「え、でも、普通に買える牛乳はこんな味しないですよ？」

「ああ、紙パックのやつ？ あんなのは牛乳じゃないわよ。コレがちゃんとした牛乳。”低温殺菌”の牛乳。瓶詰めだね。」

「低温殺菌？」

「そう。60 くらいの温度で40分くらい殺菌する牛乳。普通の紙パックのやつは130 とかで2秒殺菌とかだから、手間のかかり具合は全然違うわね。欠点は保たないことかしら。3日くらいが限度だから。紙パックだと臭いも移るのよ。乳製品は他の物の臭いが移りやすいの。」

そんな牛乳があるのね……。

「遙さんってとっても料理が上手ですけど、上手くなる”コツ”ってありますか？」

そう私が聞くと、

「私にも教えて下さいー!!」

「それがしにもー!!」

「あらあら……。一番はやっぱり、”美味しいモノを食べたい”っ

という欲求かしらね。

あなたたちも、きちんとしたレストランとか料亭に連れて行って貰えるでしょ？そういうときに、作り方とかちよつと聞くのよ。ソースの材料とかね。勿論、素人の私たちには到底真似することはできないけど。

でもね、美味しい所ってどこも基本は共通してるように私には思うのよ。素材にこだわりの、素材を生かし、手間を惜しまず。ってころがね。

最近の、”3分クッキング”とか”手間をかけない料理”が流行ってるけど、それじゃ絶対美味しいモノはできないから。まあ、逆に手間をかけすぎてもダメなんだけどね。

とりあえず、最初のアドバイスは

”プロの料理人が家庭向けにある程度簡単にできるように書いたレシピ本”

を買って、その通りにやることかしらね。調味料を1g単位で測るとか、そういうことを面倒がるんじゃないやダメよ。

料理研究家のレシピはハズレが多すぎるからあんまりオススメはしないかな。

欠点は、セミプロ向けでもあるから入手困難な材料が使われてる料理が載ってたりすることかな……。そういうのは作っちゃダメよ。あと、切れる包丁を使うこと。1・2万くらいするステンレスの万

能包丁1つあれば充分かな。」

やっぱり上手な人はやることが違うなあ……と思うと、沙織が、

「遙さんもレシピ通りに作るんですか!？」

とびつくりした声をあげた。

「当たり前じゃない。まあ、参考にするだけだったり、あるいはチョコチョコとアレンジしたりするけどね。まあ、それはかなり慣れてからかな。初心者と中級者の違いは調味料をいちいち測るかどうかよ。まずはちゃんと測って作る。そのうち、慣れたらあとは」勘ね。」

「なるほど……。ちなみに、お菓子作りのポイントは何かありますか?」

そういえば沙織はお菓子作るの好きだったわね。

「お菓子はとにかくレシピ通りにやって、あとは計量と粉をふるうことに尽きるわね。こっちは0.1g単位で測らなきゃダメ。あと、粉は最低3回はふるうこと。そんなトコかな……。まあ、ともかく、美味しいの作ろうと思ったら妥協しちゃダメよ。」

「ありがとうございます。ところで、今度私のお菓子のどこがダメ

か教えて貰うことってできますか？」

「別に構わないけど……。ただ、来月末まではいろいろ忙しいから、5月以降かな。それまで今言ったことをきちんとやっごらん。」

「それでもいいです。よろしくお願いします！」

そう言つてガバッと頭を下げる沙織。上手くもなく下手でもなく……っていうのが沙織の料理の腕前。彩香が上手いのはこの母親に教えられたからなのね……。

そして食後にはオレンジジュースを貰い、さっきの話の続き。

「で……。その ” 章人さん ” が ” 彼氏 ” じゃないっていうのはどういうことなの？」

そう私が聞くと、

「……。怜架ちゃんの水泳部の悠季ちゃん、有瀬悠季って子のことわかる？」

「……？ 悠季がどうかしたの？」

「怜架、その子はどっいう子なの？」

「うーん、特徴と言われても……。何となく、水泳部には私のこと

を崇拜するっていうか、そんな雰囲気、うーん、まあ、如月の取り巻きの雰囲気に近いかな。があるんだけど、その中で唯一そういうのが無い子。まあ、多分私以外そのことに気づいている人はいないと思うけど。」

「その悠季ちゃんと私ですーっと、私が結婚する」　っていう争奪戦をしてるんですけど、当の本人にはその気は全くないみたいなんです……。

” 近いうちに会える ”　そうなんで、その時に問いたですつもりですけど……。お母さんは ” 応援する ”　って言ってくれていますけど、お父さんは ” 何があろうと絶対反対 ”　って言ってますし……。もう何がなにやらよくわからないんです……。

昔は手紙と一緒に小さい絵を入れてくれていたんですけど、あるときから ” もう絵を描くのは止めた ”　って手紙で書かれて……。思わず章人さんの家まで行ったんですけど、 ” 描くのは止めた ” の一点張りで……。」

いつも嬉々として話すけど、どこか陰があるように思えたのはこういうことだったわけね……。にしても、争奪戦とはまあ……。

しかし、ますます彼がどういうタイプなのか分からなくなったわね。しかし、見せてくれた封筒には面白い消印が。コレは都庁？

「ちなみに、彩香がその人を表現するなら、どう表現する？」

思わずそう聞く。と、

「自分には苛烈に、相手には優しく、それしかないように思います……。私にも悠季ちゃんにも、あと、”羽深”という可愛い妹がいるんですけど、そういう周りには優しいですけど、自分には手を抜いたりしないような、そんな感じです。まあ、羽深ちゃんから聞いた話でもあるんですけどね。」

これはほぼ確定ね。しかし、やっぱりバケモノであることに変わりはないみたいね……。

本当はどんな人なのか、そして、彩香と如月がどういう反応するか楽しみね。

そして、紅茶とティラミスをおやつに食べてお開き。

夕食後

「何じゃ、随分嬉しそうというか、面白いモノを見つけたような顔をしとるのう。何かあったか？ 怜架。」

「お祖父様、いえ、その、これまでとは違うヒトに会いまして……。」

「ほう……。男か。ようやく怜架にも春が訪れたか。ほっほっほ。」

「そんなんじゃないありません!」

思わずムキになって反論する私。

「まあ、それならそれで良いが。ところで、その素晴らしい男の名前は聞いたのかの？ お前のハートを射止めた奴の名を。」

「だから違つと……。名前？ 早坂章人っていう人でしたよ。私の1つ下らしいです。」

それまでニコニコ顔で話を聞いていた祖父の顔が、その名を聞いたときに一瞬強ばつたように感じた。まあ、気のせいだと思うけど。

「そうかそうか。また会えるといいのう。さて、怜架の出会いを祝してもう一本空けてくるかの。お前もあと2年半ほどでこの味がわかるようになるんじゃないが、それまではガマンじゃな。」

もはや反論する気力も起きない……。

「……。お祖父様、お休みなさい。」

「うむ、また明日な。」

怜架Side 第2話 昼食会（後書き）

そんなわけで、のんびり進みます。

恋姫より先にこちらを何話か進め、恋姫の主人公「北郷一刀」を出してあげる予定です。

章人Side 第3話 憂ひ事（前書き）

2章立ての作品にしようと思ったんです。

思ってたんですが……。

最終更新日がうまく反映されないの、読みづらと思いますがこの形式でいかせてください……。

大変申し訳ありません。うまくいく方法みつけたら掲載方法変更致しますので。

章人Side 第3話 憂ひ事

4月1日、日曜日 今朝はいつもより少し早く目が覚めた。5:30。着替えて顔を洗って、そして新聞を取って戻る。ちょうどその時に来客が。

まあ、こんな時間に来るのは彼女しかないわけだが。

「お早う。今朝はまた随分早いねえ。てつきり10時頃来るものだ
と思っていたのだけど。」

「お早うさまです。いろいろ打ち合わせが必要かと思ひまして。ですが、早いのは章人さまも同じでは？ いつものことですが新聞の量が多いですね……。読売・朝日・毎日・日経に中日とおまけにニューヨークタイムズもですか。」

「と言っても、君はもう4紙は読んできたんだろう？ 先に読むかい？」

そう言つて中日新聞とニューヨークタイムズを渡す。毎日何時に寝て何時に起きてるのかね？

「ルモンドやガーディアンも読みたいと言へば読みたいが、一紙目を通すのに最低でも15分はかかるし、できれば20分はかけたいからね。減らさざるを得ない。」

「では貰いましょうか。海外のリベラル紙がお好きなのは相変わらずですか……。」

「ああ。日本の新聞は色々読んだ方が面白いけど、海外のリベラル記事の論評はコレでなかなか面白いよ。」

朝食前に新聞を4紙ほど読み、1時間ほど経過。そろそろ食事を作らなければ。

「朝食は7時ちょっと前から召し上がるという習慣も変わらずですね。朝のニュースと一緒にという。」

「一度染みついた習慣はなかなか抜けないものだよ。改善しようとも思わないしね。」

「朝の羽深ちゃんとのふれあいも大切では？」

「まあ、それもそうだが、朝は情報収集が一番大事だよ。それに、別に朝は口をきかない、というわけでもないしね。」

そっついながら、焼き魚、お浸し、味噌汁、ご飯を食卓に並べる。勿論、二人分。

「ご馳走さまです。美味しい物を朝から頂戴できるほどありがたいことはないですね。」

「私より料理上手な方から言われても……なのだが。」

「そう仕込んだのは他ならぬ貴方でしょうに。素直に受け取って下さいませ。」

「勤続60年近い女中やら並の料理人、挙げ句執事までを2年もかからずに追い抜くような人がいるとはとても考えられなかったのだけれどね……。まあ、そうするか。ありがとさん。」

そして朝食を食べながらニュースを見て、残りの新聞を読み、食器を洗い。

緑茶でまったり。

「やっぱり和朝食には緑茶だね。たまにはパンにコーヒーも悪くはないけど。」

「そうですね。やはりいい道具で淹れたお茶は格別ですね。」

「まあ、まだ10年やそこらしか経っていないんだが、それでも萩は味があつていいよ。しかし……これから御大と会うのはどうも気がすすまんなあ……。」

「松原のお爺さまですか？ この間お孫さんとお会いになったという」

「それもだが……。宗祐宗匠だ。いったいどうしたものか……。」

出るのは溜め息ばかり……。だ。

「まあ、まずは松原さんのほうから何とかしましょうか。」

「そつちは大した問題じゃないだろう。まあ、爺さんが”私があの子に会ったことを知ってる”というのは確実だろうけど。」

「彼女が自分から話すほど気に入られた……と？」

「まさか。爺さんなら誰か”不思議な奴”にあの子が会ったことを表情なり何なりから読み取るのは容易いだろう。初めてあった私でさえある程度の表情が読めるのだから。まあ、私や君が早熟すぎるのはこの際おいておいてだ。」

「確かに、親族ならば尚更……ですね。”遠矢”^{とおよ}や”榊”^{さかき}の一件で一番肝を潰したのはあの方ですから、過敏になるのも致し方ないかと。」

「まさにそれだ。しかし、蠅を潰して何が悪いのか知りたいのだが。別に法に触れたわけじゃあるまいし。」

「問題は”そこ”かと……。」

と言い、呆れたように溜息をつく千砂くん。まあ、当然の報いだろ
うに。

「しかし、”楠原” ”松原” とくれば、”不動” ”相馬”
”鳳” にも似た孫がいてもおかしくないな。これは楽しみだ。」

「そうですね。さて、宗祐宗匠の件はどうなさいます?」

クスリと笑った後に最大の問題を持ってきて下さる。まったくもつ
てどうしたらいいものか……。

「それだ……。率直に言つて、悠季は茶道界では”異例中の異例”
の存在だと思つてゐる。この歳まで口々に自分の流派の修業すらしな
かった家元の直系なんて聞いたことがない。茶道以外の家元のこと
を考えても。3歳・遅くとも5歳あたりから仕込まれるものだぞ。
普通は。私でさえ最初は5・6歳だ。最初は大嫌いだったが。」

「そうですね。そして、それを”放任”させてきた宗祐宗匠も”異
例”以外の何者でもないです。しかし、少なくとも暁雲氏は自分た
ちの責任だと思つていないですし、

むしろ”有瀬”という別格の名家に生まれた悠季とすら結婚したがない章人さまのことを”有楽への挑戦”或いは”侮辱”としか思っていないんじゃないですかね……。」

「原因は暁雲氏の指導に宗祐宗匠が手一杯で悠季にまで手が回らなかったことにあるのだけどね……。まあ、しかし悠季の感性にも問題がある。」

「あっさりと億を超える素を見抜いちゃいましたからね。茶道の”負の側面”を見れば”茶道そのもの”さえも嫌いになってしまうような感性を持つのもよくわかりますよ。」

「昔の私がそうだったからね……。無論、私はあれほどの感性は持ち合わせてはいなかったが。しかし、その話を直接、宗祐宗匠にする訳にはいかないだろう？ あれは悠季にとっては宝物みたいなものだ。それを奪われても困る。そんなことをすれば悠季はさらに茶道を嫌いになるから。」

「しかし、洒落であのレベルの逸品をタダであげるような馬鹿は章人さまくらいかと。」

「まあ、褒め言葉と受け取っておこう。」なかなかの感性”だと思つて古道具屋を貸し切つてちょっと試してやったんだが、何の迷いもなくアレをあっさり選ぶとはさすがに思つてなかったよ。まあ、

あの子の未来への投資だと思えば安いが。」

「そして、早く”継ぐ”と言ってもらわなければ義兄か義妹ができる……と。」

「そう。おそらく、今日いらっしやるとすればその通告をなさるのだろう。早ければ夏明け。遅くとも来年中。……希望的観測すぎるか。遅くとも今年いっぱいだろう。」

「でしょうね……。とはいえ、そう言われようとそれだけで結婚するつもりは」

「ない。」

そりゃ、脅されたから結婚するというのもあり得ないが、ましてや……。

「私が悠季と結婚すること、それはつまり、あの子に茶道はさせないということだ。無論私もやめるが。」

「そうすれば羽深ちゃんが家を継がざるを得なくなる。そして、あの子の感性を潰してしまう、と。」

「羽深が継ぐのはまあ、君と斎藤君、それに楠原のおやつさんがい

ればなんとか務まるだろうが……。あの子が茶道をしないのは日本文化における大きな損失だ。恐らく、才覚は有楽の開闢以来、数本の指に入るだろう。目覚めれば。」

「目覚めれば、ですね。しかし……章人さまが表千家以外の茶道をなさるおつもりは」

「ない。」義理立て” と言われればそれまでだろうが、私のような若輩者を堀内宗匠は受け入れて、直弟子という信じがたい待遇までして下さった。表千家以外の茶道に足を踏み入れる、それは即ち堀内宗匠を裏切ることだ。そのようなことは絶対にできないよ。」

「つまり、悠季ちゃんと結ばれる方法は、お互いが茶道をやめるしかない。」

「ああ。他流派の家元の一人しかいない直系に対して『別の流派の茶道をさせましょう』なんて厚顔無恥な行いもできないよ。」

「ただ、問題は……。」

そついった彼女の言葉の最後を引き取る。

「所詮”エゴ”にすぎない行いであり、それをご理解下さるのはなかなか難しい……ということだ。」

「……。悠季ちゃんが全てを知ったら、『どうして別の家に生まれなかったの?』と訊かれそうですね。」

「まあ、その時は『別の家に生まれていたら会う確率はかなり低かったろう』という、慰めにもならない慰めをするしかないのかな……。」

「……。この話題だけはどうしても溜め息が尽きませんね……。」

「それだけ、お互いが重いモノを背負っているということなんだろうけど、しかし……。君という相談相手が居たのが唯一の救いかな。この繊細すぎる世界の物事を識^しり、なおかつお互いの個人的な事情まで知っているのは君しかない。」

「毎度毎度付き合わされる身にもなって頂きたいですね、他はなかなか楽しめるのですが、これだけは……。」

苦笑する彼女。まあ、もはや笑うしかないのだが……。

「まあ、勘弁してくれ。あの子なら、”如庵”を見て”本物の茶道”を宗祐宗匠から直々に教育を受ければなんとかなると思うのだけど……甘いかな？」

「確かにそうですね。」別格”の茶室です。そういえば今年は表千家の献茶もありましたね。私たちは入れないでしょうが……。確かに人生観が変わるかもしれませぬ。彼女なら。」

「そこは悠季に頼むしかないさ。あの子の頼みなら」大抵”はきいてくれるだろ。」

「大抵”の領域ではないと思いますが……。」

「まあ、そうなんだが。おや、いつの間にか10時半だ。そろそろ行こうか。そうそう、もしかしたら奥田先生もいらしているかもしれない。だからと言うわけじゃないけど、いい酒を持って行かなくてはね。」

「奥田会長がですか？ 確かに松原のお爺さまとは旧知の仲ですが、経団連会長をも務める多忙な方ですよ。」

「おやっさんが”ビッグゲスト”と仰っていたし、いらつしやるとすればあの方くらいしか思いつかないな。いつものメンバーよりは刺激も加わるし良いよ。暁雲氏は遠慮なさっていることを願いたいのは率直なところだけだ。」

そう言ってお互い苦笑い。

「では、参りましょうか。」

さて、どうなるか。

この会合が終わればあとは始業式、来週の月曜を待つのみ。トラブル

ルなどなければそれでいいんだが。

章人Side 第3話 憂ひ事（後書き）

今作では注は多分付けません。話が進むにつれ明らかになればそれでいいですから。

家元の解釈など、（いつものことですが？）殆ど独自ですのでご了承くださいね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8336x/>

セレブでミステリアスな学園生活

2011年11月20日16時58分発行